



ベトナム市場から見た 県産リンゴの評価

～10年目を迎えたベトナム向け輸出～

今年で10年目を迎えたベトナム向けリンゴ輸出。ベトナムでは大玉で高品質な青森県産リンゴが好評であり、特に、年明けを祝うベトナム最大の祝祭「テト」期間中に贈答用としての需要が高い。しかしながら、現地では他国産リンゴも多数並んでおり、10年前に比べると他国産リンゴの品質が向上してきているのも現状だ。市場評価としては安価で購入しやすい他国産リンゴと高品質で高価な本県産リンゴという位置付けがされているものの、競争は激化しているようにも見える。今回、ベトナムの旧正月「テト」を前に活気づく現地を訪れ、県産リンゴの販売状況視察及び取引先との情報交換を行ったことから、他国産リンゴとの競争を勝ち抜くために何が求められているのかを共有し、更なる産地強化に繋がっていきたいと思う。

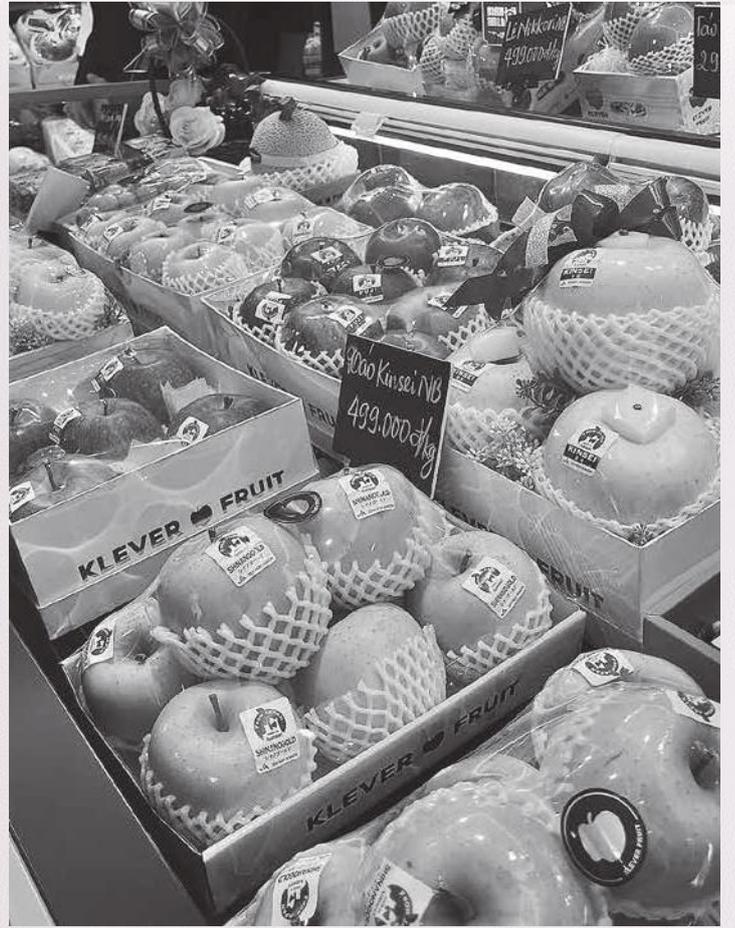
これまでの取組経過

平成27年に収穫までの袋掛けを条件として輸出が解禁され、新たな市場として有望視された「ベトナム社会主義共和国」。検疫条件には生産園地の登録やベトナムが侵入を警戒する病害虫に対する検疫措置が含まれており、園地や選果梱包施設における植物防疫官の検査を毎回経て輸出が行なわれている。これまで当JAを含む県内4JAが取組み、世界・陸奥・有袋ふじ・王林・金星・シナノゴールド・サンふじ・ジョナゴールドの8品種の輸出を進めている状況だ。また、販売促進については、現地でのPR活動やSNSを用いたプロモーション活動も実施し、旧正月の贈答需要は基より、旧正月以降の需要拡大に向けて県産リンゴの認知度向上にも努めてきている。

ベトナムの果実需要

ベトナムでは日常的に果物を食べる習慣があり、食後は必ずといっていいほど果物を食べる。また、現地のハッピーカラーとして黄色は特に親しまれる傾向があり、県

産リンゴの8品種の中でも大きくて甘い「金星」は輸出当初から非常に人気が高い。また、酸味とシャキシャキとした食感のある果物も好むため、令和5年産から輸出を始めた「シナノゴールド」は、金星に次ぐ有望品種として認知されつつあり、黄色リンゴは日常的に一定数の需要がある。赤いリンゴについては贈答用としての需要が高く、特に「世界一」・「陸奥」については旧正月に合わせ、大玉で見映えのよいリンゴとして選ばれ



ることが多く、安心安全・高品質な県産リンゴは他国産リンゴに比べて非常に高い値段で売られているのが現状だ。県産リンゴを購入してくれる消費者の期待を裏切ることがないように今後も高品質なリンゴを生産及び販売していかねばならないことを再認識する機会となった。

県産リンゴの信頼維持

現在に至るまで県産リンゴの認知度と評価を獲得してきた一方、

産地事情における生産量の減少と栽培環境の変化は今後の課題として挙げられ、近年の温暖化に伴う産地での収穫前落果や硬度低下は特に問題視されている。また、ベトナムは日本よりも温暖な気候であることから、収穫時点での硬度低下は輸出後の現地において、今まで以上に軟質果をもたらす危険性が高い。リスク回避と消費者との継続的な信頼確保に向けては適期収穫の徹底が重要であることを再認識した。さらに、病害虫の発生種類についても温暖化を背景とした影響が顕著に見られてきている。ベトナム向けリンゴ輸出に限らず、病害では「褐斑病」、「輪紋病」、「すす点・すす斑病」、虫害では「ナシマルカイガラムシ」や「シンクイムシ類」などが挙げられ、この他にも収穫時の「疫病」などにも十分注意していかねばいけない。一度検出されると出荷停止になる対象病害虫もあるため、産地の信頼維持と安定供給に向けては青森県一丸となって取り組んでいかなければならない問題だ。



ベトナムの首都ハノイ市

KLEVER FRUIT



人気品種は
前面に陳列



贈答用の
詰め合わせセット



高級フルーツ店クレバーの店内



「AOMORI」を強調した売場

Family Mart



キレイに個包装され陳列される
本県産リンゴ

TONY FRUIT



テトに向けた宣伝ブースの準備が進む

市場動向調査

今回訪れた商談先の、トニーフルーツ社は卸売業等を営む大手だ。商談では、現在の販売状況や消費者の嗜好、今後の展望などを伺うことができた。トニーフルーツ社の意向は県産りんごの取扱数量を増やしたいということと、小玉果等を含む割安な商品も取扱い、消費者層の幅を更に広げていきたい



県産りんご本来のおいしさを届けるために意見交換

このことであつた。大玉・高品質のりんご販売を減らすということではなく、多彩な商品の販売も手掛けていきたいとのことであつた。品質に納得し、高価格でも取扱数量を伸ばしていきたいとの嬉しい申し出の反面、産地においては生産者の減少や労働力不足等を背景とした有袋栽培の生産量維持が課題の一つとして挙げられる。

一方、輸出を広げていく上では、船便出荷に伴う常温輸送にも課題が残ると感じた。特に、「サンふじ」については蜜入りがリスクとして挙げられる。輸送中に発生が懸念される果実の内部褐変にも最大限

の注意を払い、商品ロス軽減を考えていかななくてはならない。現地では、有袋果でさえも軟質化が懸念されており、県産りんご本来の美味しさを海外で味わってもらうためにはスマートフレッシュや現地の冷蔵完備施設等も含めて品質保持が大きな課題の一つと感じた。

現地視察を終えて

経済発展が続き、平均所得の増加に伴い富裕層や中間層の割合も増えていたベトナム。現地の販売状況視察では、10年前に比べて県産りんごを手にする層幅も広がっていた。また、大玉で見栄えの良い県産りんごは引き続き高い評価を頂いており、店頭では他国産よりも2倍以上の値段で販売され、価格とともに需要も維持されている状況だった。特に、金星・むつ・世界一などの日本にしかないような品種が人気であり、有袋栽培という点も先人たちが築き上げてきた日本ならではの高品質生産技術である。需要が高く、高値で取引されているこれらの品種は生産量が年々減少傾向にある反面、消費者から求められている人気商品と

して生産量維持に努めていきたいところだ。視察では「良いものは高くても売れる」ということが大いに感じられ、高品質生産に取り組んでいることで他国産との差別化が明確に図られていた。産地においては高齢化や補助労働力不足、温暖化の影響といった様々な課題が挙げられ、課題解決に向けては園地の傾斜地から平坦地への移行、省力樹形やスマート農機の導入、スマホアプリを活用した人手確保、日焼け果や軟質果・収穫前落果等の高温障害対策資材の活用など、多方面への取組みがより一層必要と感じた。他国産りんごとの競争



多くの他国産りんごが陳列棚を占める



1kgあたり2,000円を超える青森県産りんごも

に打ち勝っていくためには、今後も品質に対する消費者との信頼維持に努め、「日本産」「青森県産」として求められる高品質なりんごを継続して届けていくことが重要だ。当JAでは高品質安定生産に向けた栽培をこれからもサポートし、生産から選果・貯蔵・出荷までの一連の流れをしっかり進めて参ります。また、輸出に偏ることなく国内需要の維持に努め、農家所得向上を目指します。今後地域一丸となって産地力強化を図り、令和7年産も美味しい「飛馬りんご」を作り上げましょう。

農業振興課 佐々木 善久